

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 25 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520464

研究課題名(和文) 事態内視点の認知図式化に関する研究

研究課題名(英文) A Study on diagrammatical formalizations of Event-internal Perspective

研究代表者

町田 章 (Machida, Akira)

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：40435285

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、事態把握の様式、特に、事態の参与者として事態の内側から事態を把握する事態内視点の図式化を行うことであった。事態内視点を拡張の出発点としていられるのは、主観的移動表現、主観述語文、日本語ラレル形式などである。本研究では、これらの表現に見られる主観的な事態把握を図式化するだけでなく、その拡張過程に見られる客体化に課される制約から様々な言語現象の検討を行った。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to formalize Event-internal Perspectives with diagrams. The grammatical constructions considered in this research are subjective motion constructions, subjective predicate constructions, Japanese RARE constructions, and so on. We not only successfully describe these constructions with explicitly defined diagrammatical notations, but also we investigate various linguistics phenomena in terms of some restrictions on objectification process.

研究分野：言語学

キーワード：認知文法 客体化 事態把握の様式 ラレル ている 主観述語 主観的移動 感情形容詞

### 1. 研究開始当初の背景

認知言語学は、言語能力と他の認知能力は不可分であるとの立場を取り、自律的統語論を中心とした言語研究の限界を乗り越えることを目指している。そのため、認知科学一般の様々な研究と連携しながら複合的に言語を調査研究している。そのようなスタンスに立つ認知言語学の中でも、Langacker の提唱する認知文法は、包括的に言語現象を記述することを目標としており、樹形図や形式的操作を用いずに様々な文法現象を記述することを目指している。特に、認知文法で提案されている認知図式は発見的(heuristic)な特徴を備えており、その意味で Langacker の認知文法は、現在の認知言語学のパラダイムの中では最も重要で中心的な機能を担っているといえる。

しかしながら、認知文法研究の現状は以下のような問題を抱えているといわざるをえない。

認知文法には、その理論構築の過程で英語バイアスがかかってしまっている。従って、認知文法の図式をそのまま他の言語(日本語など)の分析に援用しようとするとは不自然な分析になることがある。

現在、認知文法の図式を用いた日本語の分析は多いが、残念ながら、図式の誤用や乱用が多く見られる。

Langacker 自身が 'it is quite easy to do CG badly. (中略) To do it well is obviously much harder. (Langacker 2008:12)' と述べているように、言語表現の表す事態を正確に図式化するのは大変な作業であるが、この作業が厳密になされていない研究が散見される。

Langacker の認知図式は、本来、非常に厳格に制限された制約の下で用いられてはじめて発見的な効果が期待できる理論構成物である。その一方で、そのような制限を取り除いて緩やかに用いると言語現象の大切な側面を隠してしまう恐れさえある。残念ながら、現在の認知文法を用いた日本語の分析には、厳格な規定が守られていない研究が散見されるのである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、Langacker(1985, 1990, 2008)の認知図式では十分に記述しきれない言語現象があることを指摘し、Langacker の認知図式に修正案を提示することにある。

Langacker の認知図式は、事態を認知主体が外から眺めるというステージモデルを前提としているが、このモデルでは事態内視点・事態外視点という視点の置き方の違いを図式化することができない。そのため、日本語のような事態内視点を多用する言語を正しく記述することができない。本研究では、認知図式をより精緻化し普遍性を高めることにより、認知文法をより包括的に言語現象を説明できる言語理論に高めることに貢献することを目指した。

### 3. 研究の方法

上記の問題意識から、町田(2009)では、Langacker の視点構図(viewing arrangements)の理論的不備の指摘とその解決策に関する研究を行った。Langacker(1990)などで提案されている主体的・客体的把握の二項対立では、(1)における認知主体の自己把握の差異が明示的に図式化できない。

- (1) a. John is sitting across the table from Mary.  
b. John is sitting across the table.

(1)の認知主体はともに主体的把握を受けており、Langacker の図式では、どちらの認知主体もステージの外から事態を眺める傍観者として描かれることになる。しかしながら、実際には(1b)は(1a)とは異なり、認知主体の視線が事態の解釈に積極的な役割を果たしていると考えられる。主体的把握を受ける認知主体にも傍観者の自己(1a)と事態の参与者の自己(1b)があるのである。

町田(2009)では、Langacker の枠組内でこの両者を区別するために主観的状況(SS)という認知領域を設ける修正案を提案した。この修正案のポイントは、OS を本来の定義通り客観的状況だけに限定し、認知主体 V からの「見え」を表す領域として主観的状況 SS を設定したことにある。そして、この SS を直接スコープとすることによって、SS 内の要素をプロファイルすることができるようになり、認知主体(グラウンド)と主体と客体との関係性がプロファイルできるようになった。この修正により、表現されないガ格を認知文法でどのように扱うべきかという問題を解決することができた。日本語の tr はガ格で標示されると考えられるが、(2)のように、表現されない tr の存在は、認知文法枠組みでは取り扱いが難しかった。(2)における「ゆでる」「むく」の tr はグラウンド G であると考えられるが、(2)で G(「私が、あなたが、私たちが」など)を明示することはできない。

- (2) 栗はゆでてから、皮をむきます。

問題となっているのは、定義上、tr は最も際立ちの高い参与者であるにもかかわらず、(2)のような表現では、tr が明示できない点である。そして、町田(2009)では、(2)で tr が明示できないのは、この表現が事態内視点を取っているからであるとした。つまり、この表現には、傍観者として事態を外から眺める主体ではなく、事態に積極的にかかわる参与者としての主体が含意されているのである。そして、このような事態内視点における認知主体は、言語表現に現れないが、プロファイルを受けていると考えるのである。そして、この修正案を採用すると、Langacker の枠組みから逸脱せずに、この事態把握の様式を明示的に図式化できるのである。

この図式を用いて、これまで、ラレル構文

の多義の構造を分析し、さらに、直接受身の視点制約や間接受身の発生のメカニズムを提案してきた。また、同じ図式を用いることで、なぜ(3a)は主観的移動を表しうるのに、「私に」を加えた(3b)では、客観的移動しか表せないのかも説明できるようになる。認知主体を客体化し OS 内に上げれば、それに伴い「近づく」という関係性も OS に上がらざるをえず、そのため、客観的把握を受けざるを得ないのである。

- (3) a. 金沢がだんだん近づいてきた。  
b. ? 金沢が私にだんだん近づいてきた。

上記の修正案を用いると、対象を表すガ格（水が飲みたい、幽霊が見える）などが Langacker の枠組みを厳密に用いても表せるようになる。そして、この事態内視点と参照点構造を用いた客体化を想定することにより、二重主語や間接受身などの項の増加現象を認知文法の枠組みで説明できるようになる。

以上述べたように、本研究は認知文法の枠組みで日本語文法を包括的に図式化する基盤整備として重要であると同時に、英語や他の言語に対する従来の分析に対して再考を迫るものである。

これらの現象を扱うために、本研究は、コーパスによる事例の収集と平行して生成文法などで頻繁に用いられる作例による思考実験によって行われた。

#### 4. 研究成果

本研究によって得られた成果は以下にまとめられる。

- 日本語のラレル構文に見られる多義性を事態内視点と認知主体の客体化という観点から明らかにした（口頭発表(2007) The 10th International Cognitive Linguistics Conference, および、論文(2011)大庭幸男・岡田禎之（編著）、東京、163-177.）。
- 日本語受身文が未分化の受身から直接受身・間接受身へと拡張していく認知メカニズムに関して事態内視点と認知主体の客体化という観点から明らかにした（招聘発表(2011) 日本英文学会北海道支部第 56 回大会）。
- いわゆる日本語の主語の省略現象に関して事態把握の様式がどのように関与しているかを明らかにした（論文(2012), *JCLA* 12, 246-258.）。
- 事態内視点という事態把握の様式が日本語だけでなく英語の中間構文などにも見られることを示した（論文(2013) *JCLA* 13, 661-666.）。
- 認知文法においても言語の構造を記述することが不可欠であることを明らかにした（論文(2014) *JCLA* 14, 768-773.）。
- 日本語間接受身文に被害（迷惑）の意味合いが生じる認知メカニズムを明らかにした（論文(2015) 大庭幸男教授退職記念論

文集刊行会（編）、東京、461-473.）。

- 日本語の感情感覚形容詞と対象のガ格構文に見られるいわゆる人称制限に関して事態把握の様式の共通性から説明を与えた（招待発表(2015), 京都言語学コロキウム 第 12 回年次大会, 『認知言語学論考』 13, ひつじ書房, 印刷中）。
- Subjectivity という英語を主観性と主体性に訳し分ける必要性を示し、Langacker の視点構図の不備を詳細に議論した（論文(印刷中)「傍観者と参与者 - 認知主体の二つのあり方 -」）。
- 日本語「ている」の多義性を認知図式の合成構造から明らかにした。その際、「ている」に内在する事態外視点がいわゆる主観述語の人称制限を無効にし、自発の「られる」を受身用法に変更する認知的動機づけとなっていることを明らかにした（研究発表(2015), 関西言語学会, 論文(印刷中)）。
- 上記の研究成果は、平成 28 年に刊行予定の『日本語認知統語論』（小熊猛, 木原恵美子との共著, くろしお出版）の 1 章, 4 章, 5 章にまとめられている（入稿済み）。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 5 件)

1. 町田章 「認知図式と日本語認知文法 - 主観性・主体性の問題を通して -」 『認知言語学論考』 13 巻, 査読有, 印刷中。
2. 町田章 「事態把握の様式と日本語「ている」構文 - 認知文法からのアプローチ -」 *KLS*, 36, 査読有, 印刷中。
3. 町田章 「英語属性叙述受動文の合成構造」 『日本認知言語学会論文集』第 14 巻, 査読有, 2014, pp.768-773.
4. 町田章 「身体的経験者と観察者 - ステージモデルの限界 -」 『日本認知言語学会論文集』第 13 巻, 査読有, 2013, pp.661-666.
5. 町田章 「主観性と見えない参与者の可視化 - 客体化の認知プロセス -」 『日本認知言語学会論文集』第 12 巻, 査読有, 2012, pp.246-258.

〔学会発表〕(計 7 件)

1. 町田章 「認知図式と日本語文法 - 主観性・主体性の問題を通して -」 (招待発表) 京都言語学コロキウム 第 12 回年次大会, 2015/08/29, 京都大学。
2. 町田章 「事態把握の様式と日本語「ている」構文 - 認知文法からのアプローチ -」 第 40 回関西言語学会, 2015/06/13, 神戸大学。
3. 町田章 「英語属性叙述受動文の合成構造」 (ワークショップ「認知文法における事態叙述の在り方 - 「事態」をどのように概念化するか -」) 第 14 回日本認知言語学会, 2013/09/21, 京都外国語大学。
4. 町田章 「身体的経験者と観察者 - ステージ

モデルの限界 - 」(ワークショップ「身体経験に基づいた文法研究の可能性」) 第 13 回日本認知言語学会, 2012/09/08, 大東文化大学.

5. 町田章「日本語受身文の分化と客体化 - 経験主発生の認知メカニズム - 」(招聘発表) 日本英文学会北海道支部第 56 回大会, 2011/10/01, 札幌学院大学.
6. 町田章「主観性と見えない参加者の可視化 - 客体化の認知プロセス - 」第 12 回日本認知言語学会, 2011/09/17, 奈良教育大学.
7. Machida, Akira '(In)visible Interactive Conceptualizer: A Cognitive Account of Japanese *rare*-Construction,' 11th International Cognitive Linguistics Conference, 2011/07/15, Xi'an, China.

〔図書〕(計 4 件)

1. 町田章「傍観者と参加者 - 認知主体の二つのあり方 - 」中村芳久・上原聡(編著)『ラネカーの(間)主観性とその展開』, 印刷中, 開拓社, 東京.
2. 町田章「コントロールサイクルと被害性 - 被害受身の概念構造」大庭幸男教授退職記念論文集刊行会(編)『言葉のしんそう(深層・真相) - 大庭幸男教授退職記念論文集 - 』, 2015, 英宝社, 東京, pp.461-473.
3. 町田章「ことばの意味と認知」広島大学大学院総合科学研究科(編); 山田純・吉田光演(責任編集)『ミスコミュニケーション - 言語学徒 英語学徒が語る』2015, 丸善出版, 東京, pp.17-50.
4. 町田章「日本語ラレル構文の形式と意味 - 認知文法からのアプローチ - 」大庭幸男・岡田禎之(編著)『意味と形式のはざま』, 2011, 英宝社, 東京, pp.163-177.

〔その他〕

ホームページ等

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/akimachida/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

町田 章 (MACHIDA AKIRA)

広島大学・大学院総合科学研究科・准教授

研究者番号: 40435285